扶桑拾葉集 十六

太政官文庫
和書門
類 三二三四五 號
函
架
三五 冊

内閣文庫
和書 類
三二三四五 號
三五 冊
二〇四函
六架

212

内閣文庫

番號	和	32345
冊數	35	(17)
函號	204	143

共卅五

国立公文書館 National Archives of Japan

閣21兄

扶桑拾葉集巻第十六

目録

河海抄序　源善成

伊勢太神宮参詣記　坂士佛

源氏物語提要序　源範政

内閣文庫

国立公文書館 National Archives of Japan

扶桑拾葉集巻第十六

参議従三位兼行右近衛権中將源朝臣光圀編集

河海抄序

源善成

光源氏物語ハ寛弘のはしめにいてきて康和の
すゑにひろまりけるより代々のもてあそひ
ものとしてところ〳〵の抄ともあり経里を中
中納言定家ハ巻々に難義を註して奥入とせ
か津家大監物光行ハ家々の旧説を抄出して水原
と名付侍り其子河内のこれかれ寸伏見仙洞
にかひしるし河同題を右まてまつりし

めく。編纂のはしまりをいにしへより後。後醍
醐院御位のはしめ。彼梨壺の卉仏し寄せ
く古葉集とよみそらしめし例とうつされけるや
黒戸の人数を定て。其十四帖と編まりし篇儀わ
りしに光卿忠守朝臣。七の流の趣の心はへら
めく。わかまねの撰集をしうる。志ゆうれ顧問に
はつりまでしむしく総従と蒙しうらいうれにみま
しぬまりむとうりれす思ふうそでもありけり
推光良清が風をうたいやしうら翁はり。桂
とわう道と申まひし青みり。推りもとれやうと
ものいふいますはそ。みより之袖の色れうく

らぬ事こそはます続く。むかしさらへ筆志
はとまそむらんさしとはりいきんと侯これ彼よ
中葉の様にはそひく。かくゆらめきとは
ら。葉便の海とくみくかさ傍と定む。とのは
しいはねのはつへしもめてや葉とひろく
専の末軒もの藤の御よいきすくらつてう
まり。はげめく廿巻とし侯。名付くは海桝と
云。なよの窓の蛍ともつひを。枝の雪はあつ
さはもい。涼くも寒くたえはさけりとうは
といへるも。故と温くはつしうは志ろ。おうち
とちんか事めりいはりが色とし高とくもけ

たり里

伊勢大神宮参詣記

坂士佛

康永元年十月十日あまりの比太神宮
参詣のこゝろざし侍りて伊勢国安濃津
と申所に着ぬ見わたし侍りしかはよろこそ
聊見侍りし人のとゝめ侍りしかとも藤
のかれ侍らぬ故にとゞまる三日逗留し
侍りぬ当津を見わたせは浦遥にし
て行き此舟人其月に漕寄泊れは
暁の枕にゆく波の音も濃風乃音まで

さく侍しかは

風おとはいそやの浪にうつる夢さへあらく
よ所なから濃りぬる袖かれ

安濃津を出てゆくさき浦をすきゆけは
ありしわやの煙のかすみくうくらむせん
見まほしき安濃川を渡る人おほくのそれより
のほる国より夢をさのみくは聴えもさとめぬ旅の
れさく見えし有様ひとつもなりひしかは冰上
よりは何処らにて隠れてたに出雲河とて雲のやえさ濃
としのきさ小野古江渡と申は名にのたと
色行けもと美都の人とさもありけんなくく

ゆう海しうもしうね道を輪うしうさ
らましとらゐれく松風ひとゐとて。こ渡
のちゆりもつきぬ遠きりて入海ありむう
ゐゐく勝彩人あ体せよこしくもを
き道てとめらうしちくさあの知るましとまち
ゆるすりとうろくしうても時あらけるかせ
うしこま屋ゆをゆくくるりしうしあ事紙。
けるゆりゐくゐすて也

渡口無船魅樹陰　漁村煙暗日沈沈
寒潮帰去途程近　又有松濤驚客心

西ありてしゐく日影ありとを。行并まてわ庭

こゝ紙多の行しう滝しとまちうく。次あゐ
こらゐの時あゐまりうりとゐらくある。生
死のこちを海ゐすを行りとよゐまこうか古集
れ書の程らひあく
うきし川をこの身とそふうゐしこの
海ゐしわゐれ山を行りそう
猿田河櫻敷とをすゝく行かとりし。世れ
中のこうりゝいしくとすりしまり。國の南を
おしうね沼のやうゝ行を果てく行れ林叢あゐ
末くをれまさを盛さりも。ちう川さゝ鏡
いゝ人屋もよし。すゝみ。かゐうやあゐしぬ

さまうしうらゝおかさもちたち行ら
との河らい行て人ゝもとこまてすん行ら
小田乃す猪乃もとめてしてみ人多けさく
いとうくはきうる世のさき段ものかしく菊
斎宮はしはかり長いふし人寺築地の跡
とゞうく草木乃ゆきさい河て行くゆゑ君を
侍る身持始めしきゝ程の道なりけるを見た
多と人へをりもうくとしゝせ阝え身の
故し来との事をおもへらくすゝさまゝ故し
斎宮ともあをしきみ久人多跡あり
ちりしわ再興まうへしつゝへもわかやうら

風情あるをしうしも葛野山荒播磨
さ風りしさもつまゝ浅茅野のちらら荒
女郎花の行えさあ露りもみをしうは
野宮乃名のさ結りらく斎宮の御下ふも
及び人神風にとあおかしさえな故あり
めとゑこのしこさちおりかな今世行らう
是はらゝふなかしの事也せししさ又神荒
いゝさ我とゑしく寸の紫みゆらす寄
のちふ思とも結ぶしゝても待り見ぬふみや
うち老あひつとたゝ今いひちもえは宝星
秋ふる萩の下かり枯葉の行さら荒た河

かゝる時にかりけん何某の草とせし秋の
花のかほよりもしるしあはれなるをもかんじ候。
秋くさはなくさとすさまし所々の秋の夜
の夢もさめぬとすてゝよりて今更に見も
せしもあつかる事はいまは何となりしさ
哀なりし夢の名残りも我ゆかし秋の夜
のうつゝよりも夢にて見侍らん
又かく申して何事にても侍らむ
夢をとゝめておもふも世の中
宮川と渡りくだる山崎を過ぎりつゝ
見れば此西坂西の里通とまうして候

おとこやまにおりては山田寮中務卿
寛も秋のむかしに思ひふけるなり是則
外宮なり三寶院にて僧坊にやどりたる
かりそめ蓮華の物語りしておはしける
祠官長官 従三位家行卿 の御事ときこえ
しをも待りたるも思ひの外なる人ありける
むかし宮河へ行ねは長官對面して是れの
またのかたりすゝみてしるべしけれは不
徳此身なれとも詳に申置する事を
し神代の世より當時はいまだ我國
給ふ刻此下りし記録などあらはし

く荅給しかは年来の不審をも雲霞の
晴たる心地すなりけるとぞ申ける。霸
の眉雪をも頂戴して時にはゞかりの水鏡なれ
皇弁舌せしより後まことしくは太神宮
の祠官也とそ雖然も倚りしかは、鈔
絵の問答をと答まてねきさきみとらく下葉の
及ひ承り伝へとも其は記す。称内宮御
鎮座は垂仁天皇御宇也。外宮御垂跡
は雄略天皇の御代也。故百年の前後なり
わりといへとも、森諸の給へ等かりかりくも先
外宮は垂跡の事といへとも記す。當宮をは天照

豊受太神と申す。則月神也。こゝに付く
神書の説をおもふに、皆日本紀としるし侍ん
なり。伊弉諾伊弉冊尊、日神を生給ひ、月
神をも生給ひて、かくのごとくの系図をとりて上
給へり。是日神月神也。日神月神は内外両宮也といふ
是よりの説也。一書云、外宮の月神すそ
ましまして事をも子細あり。但伊弉諾
伊弉冊尊のうみ給へる月神をはいはゞ
國常立尊也。天神七代は水徳始として
て月神の号なり。地神五代は火徳と伝
へきとりて日神の御名まします万物

あゝ陰陽とゝ父母としてく水火交會のことはり
なりハ是様々ある宮吉兆の習也。参宮ハ道
得てしてさらしらは人間しらおもひて得なりぬ
さりなり。生まゝりいわけいなりハ吉松花松
のとらしと詮もりかも。ゑゝらしく物とらむ
しく瑞祝事業の霜よのことも能精葉る
らしさハいろなりかしもすらる居ハ冠木もそう
得正直なりのしと照し給ふ故是と表得てら
つうさりハ丹朱とも ぬしう得ほ殿らしいは
桂俵とも 始ら得らへの形瑞しも給ふ身始
きるすしく萌芽 ここしうさらりむかし

ともらはいわてもハ国楽らのしらむ民の費とど
なりともと給ひくもより宮中に参礼とてうるか
りりて殿なりまさなりにむとく文太内の構れ
こうし。彼家ハ草も。五百枝杖とも参本花
なまらく御らして。宮中へハまいりし得ても
文葉裏の礼義也。神孫くとるてし皇帝也
様し帝祖とおりうあく古神とも得
国家安全ハ是御宗廟加護也徳光
まりはともうりとなつあらく
皇らうし光とうとくハ子ともやか
伴搭して神の都うまりかまし

千木継木代星霜としへたる事一千余廻
の月次すといへとも宮居鳥居なとは
改りけりふけるいまに二十年の始め
行はれ、当国の静謐ともいのらせ給ふとぞ。
造営の延引もことにありしかは九月中ぬ。
山口祭なとゝしるしおきしかは、まことに大
縁をむすひけるの人ゝにあらずとも高家
御家の好みねまさも雄略天皇御宇。
天照太神大佐々命にして勅ましまして給ひく
天照豊受太神と我国へうつしてま
つらせとおほせしかは、命神託ありき。

奉らしめ給ひしかは、すなはち大佐々みことを
丹後の国へ下向して、神明を伊勢国へう
つし奉るへきよし勅定ありけれは、則丹後
国与謝郡比治の真井原より
御遷幸をなし奉り給ふに、先大和国
宇太のよりちかくうつせ給ひて、則一宮次伊賀国
穴穂宮御一宿、二宿次伊勢国鈴鹿郡神戸御一
宿、次山辺行宮に一宿、次渡相沼木郷
尾與丁行宮に三ヶ月まします。則号今處
名離宮といふ。今も天人くたりて神楽を備
ふ。今の世に豊明と号する其縁の例。

戊午秋九月従離宮山田原に御遷幸
ありて桐殿に三はしらの神まします。皇孫
なる天児屋根命太玉命これなり。何まれ
しかや孫若命のましまし侍へ尚宮を
宗廟社稷の神よりもすくれ給ふ事ふ富
とおもしきゆらね。皇孫尊と申奉る。天照太
神の御孫。天忍穂耳尊の御子也。又天忍
穂耳尊と申ハ高皇産霊尊天照太神の
御むつましの御ことさらにおもく御さし
せ給ふしに御子となし給ひし
と。天照太神先ハ執子の比ハあまり

まさく地神第二代の尊として御後なる高皇
産霊尊の御娘栲幡千々姫を要りまゐら
く。皇孫尊と御誕生ありけり。素戔嗚尊ハ
伊弉諾伊弉冊尊の御譲を得て我朝
のゆかりみくにしくしけり。國主とし皇孫
なりし譲ありし御身を出雲国にして御
出雲云伝ハ今世おかれ歴しわこきらう移
不審ありしハ神慮と申ししくしくさいし
中絶しけるもうたの花義のことくとことくに。
日本紀よむひ。万葉集によりて伝へなると
くまなくしられハあまり難しとさし。常情とく

ゑんしくゆかしとて。新古語を風情
とまるおらく。懲りし今案せん約おとし
る川

足引之。山田原能。宮柱。廣敷立而。天
下。高知賜。宗廟社稷之。皇御神農。垂
跡志。創者。泊瀨。朝倉能。大御門之。敎。
最恐久。辭定而。眞奈志峯農。白雲能。
棚引越志。太家山。何日母阿良氏。伊
勢國。沼木鄉社。宮居奈禮。鳥居瑞籬。
佐丹奴羅須。小荻刈葺。宮造。玉毛金
毛不飾者。四方國有。人夫者。煩。貴。事
曾奈岐。然者阿禮登母。運云。荷前筥
之。長路敝氏。子良毛御母良毛。暇波。
日日之御膳。絕藻瀨須。豐宇賀能賣
農。神爲之。大神酒御贄。忍穗井之。以
水炊。朝且佐。奉饗。氏人農。三角拍之。
常磐仁。百官之。仕者。天業仁。不異。思
之者。八隅知之。吾大王能。御心能。聽
明久賢久。御坐母。神之誓登。木綿手
襁。懸留賴能。廣前爾。降。惠農雨露。於

仰而受流。國土能。百姓裒。榮管作五。
穀物。雖置足。戸指勢奴。五百枝杉之。
湲緑。如不葉替。伊麻勢太御世

右一首奉讃外宮天照豊受大神歌也

短歌

處女子之。友爾別而。天原。振離津久。流。昔悲聞

右一首奉題豊宇賀能賣神歌也

むかし丹後國なる河邊にて天女八人下
りて水浴ひしけるをそのころ二人の老翁老
まことなく羽衣をかくしぬ天女の中に獨り

衣とられてかへることあたはず其女こゝにとゞまりけり。
それよりかのおきなにやしなはれ。衣とゞむべくもあらでおきなの女
となりて年月を経ぬ。其女よく酒を醸して
し。様々の事をなして國々の人をうるほ
るに翁はいよいよ富さかえける。其女かの老翁
へされ。其女たがひにわかれて後は家に
つね。糠又は家のまはりにて酒をつくる
こよく。其民はくらくうたひしけるに
一椀を服すれば。百病ことごとくいえければ
よろこびて其酒をのみつゝもとむる事
にして酒をくみ富貴となれり

りけるものゝちられけれ共天女は今は天に
こゝかしこにまよひて翁ありしかなくそのこ
ゝろをとゝめ給ひて翁にうくしき娘をも
もちたまはぬ女に給ひてとしへて天上より乃
ぼりたまへともかなはす家をたて給ひて翁
にすまれて養育せられしほとに又
乳母となりたる女は養育せしが
かくてあまたのとしをへてのち女をは
くくりて翁むかへとりたるなり人
まことにうれしくおもひとゝまらせたまふ

しらくよりし給ふ也

天原振離見者霞多地家路麻余伊氐行敝不知聞

此乃天女は神明の還座のところに従ひ
く丹後国より尚西にうつり給ひ
天女かくさまよひありきけるときにこゑを
奈久郡にて

題二悪樋井水一返歌 二首

まふかのとこまやかなるの秀ヶ所まで
神よりみて見えもてはやしし井の水
もとしかりく我世をもたせぬ久ふたの
清村の水樋井のこ川

ひたひなむすびて村君命は衆共は水
あ不饗なり。天と共にあさしそへん也
く。るまりのかりに行く。半漢彦
あくどく。る猶礼神としいはまりし成。
宮としきえとさ。きへ何ふ。ら共にあかく。
神借の御猶民歟し。く。ぬえとなりめ
化く。まらしなあかまし。ひ。らに月一代奇
特なり。天村君命さや、あり天照大神
御まくらく。趣し。くをかしさらて成。三十
二神御ならてし結成りし。その中共に
一神なり。祠官度會氏共に祖神ならし。

物宮なり。も巫女なりしが、身よく初稚
のし女共にいまさきしも夫婦共にもとしも
らぬに。御饗をうまふ、尚其用なりし。光
しけぬるめりかり。神宮なりかへ
なぬねまして二三十月にして月事れ
し。実際なりむさゆまして。十一二よ
そこそしいまに清くれもすかいら職と定
ひ。大宮にかなりし。以池そくへ
てみもりゆめいゆしまいれもさるを
しなり。吉に他なりも毎饗の清さんなり
なり。歳をよいのかりて拳とくれまりて

御神なりと世にいふ。此御神ハ又太神に養
しなひまいらせしによりて此桃の木をもて
し、西王母をさへ神事諸社にも例とす
文武宮おはしましける山にも希代の岩屋あり
其諸神こゝに行あそひ給ふ。仙窟と申すなり
さるを伝へ聞ける人々、岩屋にのぼり此おく十
八ちやう入りて見れば人もなく只一面に
おほきなる石南花わたりてまいりさき給ひ
ものありて又其岩の上に神おはしまして人に
物語しけるはたゞ見えけり。漢武帝の時十六の
洞天ありとも道士方術の書にみえ[illegible]

忽然として蜀山に至り千八百年を経けり。
これより仙家の遊戯をとゞめし地はまさに文神
くしやう里とて花やかなる極楽のさまに
ら給ひて、しかし洞家にも絵を朝く宴飲
の都率をさかへし所なれども騎をとゞめずく
家ぶりの旅客ののちしかも日に夜をさ
さへ帰るくわいのおもむき縁をたえて。
ありくのみとして八隅日より人おほく
女あまたくわへて[illegible]。疑ふ
昔仙家の劉阮七世の孫にあひて帰
來し朋友と共に武陵一日の花園に相

おもしろかりし色紙とりかへ、かくれなき
七くの不思議、連歌にしあそび、月読
宮より参る道すがら、蔵のくら荒行也
とゝくして庭の名草おちらしともいはれ月
読の御名にゝ、八幡代の車とせよすまし女
なころかなく
いつも珍しき家の玉ときこえける
神代の姫の月よし苔かや
山田より内宮へ参る道すがら、やしき
筆のかしこくのくらし、武士水嫌山
とうろくし敷と宰領りさかさ

七番にも有りしか、盛名をきこえしと姫とく、霧を
子蔵りくにゝとりら流り宇治業
里より外より都よちうち花の名を
見けりし外宮よりかへけりしりけりさ是
かなるまもなくよもと露と結まくしけ
す者人やにかえると申かゆゆるならけるか
め精永くてもの本ふきとうけてうかゝる
見りるもともとかへ人嬢とくろまとく煙に
まるの寺の本との流れるしく巣にける山ハ
似をかり隣くすそより宏河のさとより
かうかりし疑始二の鳥居のうちまくま

くなすれり。山下松をもちて。百度
の祓を見しにも見えたまへりて。宮中
祓いふやうのしくまつ本のうしろ紙をとる。
えうりしを抱まゐらせて信太の
身のたゞ女と業するなりし十悪んよゆる。
故にみなく神にまゐるむく祓といふこと。
一名しとりに統め。故に今神道りしと
とをさうしてあれ。総中南宮多信のみ
きよしさ金銭ともにさられ常帛とぞ
うるさんしくいはいのるれまことに内清浄
といふ。潮とうとめしとあまく身ぬけり絵さ

おとしわるゝこと。外清浄とよふり。内外清浄
りとうらねさとも神の心に叶ひてる
しげくよ神明にしるはさるなれ波を
てうちの信のこゝろすくなからや。あしき人の素宮
まりとぢうへをあるりしか不湯作の渡をくめさ
し。斎内宮の御神は神就也。まことりしく。
やもよろづの物様を此時へくまうら給
ふる御鏡也。一書云。天照太神天岩戸を
開給ひし時。天下ときやとりもうに
らし時よるもの神こそ集まりく天香児
山の榊に此鏡をかけ玉ぞかけ

青幣白幣をとりかけて神楽をそうし給ひ
しかば天照太神岩戸を細めにあけて
御覧ありし給ふところに手力雄命といふ神
岩戸をおし開きて太神をとりいだし奉
てまつりおきその御ひかりをあらはし給ひ
あめのした御かげ見えけり神武天皇より九
代までは帝と同殿にてすませ給ひけるが
第十代の御門崇神天皇の御宇六年に
おそれおほくおぼしめして別殿をたて
てうつしまいらせ給ふ温明殿と申
は第十一代の御門垂仁天皇の御

宇倭姫皇女をもつて神鏡にいつきまつらしめ
つりて遂に神鏡をとらせて国々をめぐり
かしこに御斎殿をたてゝ所々にやどり
いまそかり皇女にし給ひて其後天照女の
年三月にはじめて大和国城上郡磯
城にいつきて行てましましける
やがて又其の神鏡を奉持して大
和国宇陀郡宇陀神戸にいたりて
移ありて行し御鏡を内裏よりお
ろし由をうやまひ給ひて又上坂本の
神鏡を安置して御遷幸ありて皇女神

猿を戴くしたまふべく御結座ありし
をきこしめして。汝さるならば。仰蹈せられうる
給ひけり。歴覧あそばしてんおかし
見させ給ひける二度御覧ありて
しゆくしけり。二見浦にいたりく。皇女にの
うちより御舩にて先しく。川をわた
かけり渡給ひけりて。御出ありけすそ
せい御舟よりあまたくねをまゐらせ給ふ
しゆくして。御宮瀧河にいたりく。是せん
川みねかまをまうけり。此ほか。神道山にいたり
く。一の河ありけり。五十鈴河にもとよりの天照

大神。下宮には御鎮坐ありつきしところを
まうく旧宅ありて。猶この大神をとく
身をうせ給ひしその中に。五十鈴河のこの
給ひけり。いまもそのかみ。斎宮を立
天照皇太神と申。相殿には二神まし
ます。手力雄命栲幡千々姫命と申奉る。
神この御名をむかしとのこし。代々の記
録をいまだしるさりと。おかしき給
しかるより。継ぎ給ひてさかえ給ふらん
かゝれば世々の御かど尊

皇御孫之。勅勢志。従神代兼手降志。

種種農天津寶能一鳴五十鈴河之
水清見流受益皇之高御位之無動
下津岩根之御柱農神能宮居農自
内外國手翼父母能居諸之照天原
振離見者古之岩戸攪眞清鏡載増
而皇女之光留簪之玉匣二見浦之
湊與利御船艤而上瀬爾河波立傳
御嚢能奴禮雞流時由此河之名仁
流垂水上農神路山之岩村之常石
堅石之瑞籬毛舊奴留霜之有數登

影於雙而相生仁千歳手送百枝撓
朶於奈良佐奴神風也伊勢云國爾
垂跡御世鎮居皇御神香嚢

右一首奉讃天照皇大神歌也

短歌

天降五十鈴河乃瑞籬能舊奴留世世者神世知良牟

ひさに五十鈴河そ。大宮と風の宮ともいはむ岩
ねをあらふなみに。深山木のこのまの
清き流ハ。幾代をか経て絶せし。
この河そ世々も滅せんとそことはるへし

と神徳いつき。是ハ五月雨ふりしを
まさに軍勢しよせ。大家やら乾しけりすこし
あかり。晴に弥いかにしても悩し
ますれも。荒祭神と申也。外宮にある家内
宮の荒祭の宮も。深秘ありけるゆへにや何
も此神とやとかくしけれ。樟家とあらざ
大宮のまうけとしつらひ。ましく御とも
り御殿も明しあし一本のさらしと神
祢宜とも大にかけとよひけりがたく。
宮中へ参まいりける此の家へまいりける若
ふうさ。思ふ。つまれ遣しのこて去

本の葉れ折くるり宮井ありまいりて至
殿ありる人多月思ひすこしぬきて鶯や御
ましく御殿柵れありしありしこしらへ折りてさ
ふるく荒家松のうち代いでし御天下共
無草ハ皇道の衰微まうことさまさに給ひし
下し世これ樗乱ハ宗廟の荒廃せしも及宮
なき例の御袖ありまかりとどうりなき十
北河とみりれそ川共蔵の古くる河曲
れあり。はる還家のりうくの神寵とうし
うくおりしまつりくは稼ありくいつくうく
し殿へつきこそまつるきまてと河泉の

御殿よりはしく帝王御即位の儀式なり。
文徳天皇の御神よく河内の国渚より松枝
を垂との二もしにそへてたいりへまいる住社
をまし御さし玉神社は御庭に御座とかや
そうを〳〵まいりこまつ御殿にありといへり。
かしものゝ先は長橋の流とさかりちく縁松の
ありく行人おもしろしと離人南しとりくりさ絶
ハ宮嚴れそらしとらく行り。紅葉植りく
極客のらしとそ世とこそつまてしく盛どう
こりし物こしよ不思とりのしをさしはひいぬ
事なりし。同云内宮ハ日神女神なり月

神男神也。日神なりしかれは陽神也。男神なり
くにゝまし陰すへきなり。女神にて陽
ならんかし。昔云。火をもつて陰とし陰と陽
なりしかるを火は陽にして女とおもへは也。陽
輪をかさねて月を見れは。水を内にしり陽
なりしかくなり。水はすなはち離ぬなり。
火陰内にしりはしめてなり。水火和合
しく其陰とあらはれは事をなすの理
なりことしかれは、ゆふしられ白と
りて男を冠とゆひしをおかの行うさ
とりく女は中をとうさうことするなり陽

是水となりて火となるによりて陰ハ女なりとく
火となるに金ある露あり、いつれも神と陰
陽と異なし、くれ男ならハ陽なり同
し、女なれとも陰なり同し、縁ある是帝任
の神体にて是陰となる陽をもつ流生臨
親の當任なりハ男なり現し女にて現ず故
しくいまの水火といふ心かこころしるなり
是水火とかに配し大日なりとくく火とと
定めり對しく是水火となりてとす
あらら因縁不生の水火也故なり日神な
陽中の陰とかくし、月神、是陰中なり

陽とかくしるくくり是一陰也一陽也。
あ宮ハ天地の父母となりく万物皆出生
し給ふりこしいふなりりとも秘し。
是実の大神深義無き撰沢某下
たり横豎の根源のりの根元の極くく此秘
密なりことにとも神体となりし人か文人共
法極ともく山口条へ又大崇なりくくある
ようしまいる法極也ことに文深義あり般
若心経のことなりとも神となりし秘密なり。
此人是もの人も神道行なりする人
なり此ころ是教神の一切衆生ふ同し

それより大穢出世しく海底利
生しましまして諸々の方便をめくらし衆生を西天に
出して一代教を説給ひし事是経二千余年
也利益を施されし由来ちうまされ神道
はいさうして神代のはしめのつちは
さくりて○○し磤馭盧嶋と云所に二神
は降り給ひてかくうしまいく国土を生じ
の草木までもしつくり国すへてをさ
まりく人倫文うしまふらとうこの
しこ神道の利益をはあまねし天津彦彦
火瓊瓊杵尊は三十一万八千五百三十二年
天下を治め給ふ彦火々出見尊は六十三
万七千八百九十二年・鸕鶿草葺不合尊
は八十三万六千四十三年・国家を治め
給ふ統もは神明の国といへとも
ともに益のことわりくさりしは仏教の世
になりまつりとれさへくる濫觴をなす
かうこ・宗門をりせくつりく・故人神道
と信せさる時なり・上宮太子世をしお
く・仏法は我か光給ひし神道の化
現なり・日本以来伝教大師の小成を
をし・二宮と七社権現の感光し耀

し。弘法高祖の南山をしめし。三密瑜伽宗
即神の徳風をあふぎ。佛法をならべしは。
宗しくり神道の妙をあらはせり。諸
宗の教法ハまちまちなれども心をとて
ことごとく佛性のあらはるゝ所ハ不二の一理
也。此己心を教発よりしてハ佛心と号
し。神事よりしてハ内證冥道と擁護す。此冥
道をあらはすにうやまるゝ心をしらしむ。譬をもす
すみやかにしとる。同じ給教ありしとはハ
内證の佛ハ一心元来の觀よりおこり統
く凝迷生もしとも度すべてとく

外用の神道。七纖執殺の構りも同じ
て蒙昧凡衆も利する事やなし。
はたのことばの字といへるものとより
海こそりふかし。と縁要物絶し給しと
おもく身のさよりしねあらはれしことに
つらぬきを。○ありて参宮の神わすらうハ
やさしき神道ことさら六合のよりひと文字とともと
御へとりまじもしのまゝ○ハ神道の流
こりも花しく。慈悲盛情を禁しこと
し。山風とうとくしきくうをすゝまる
さりく河のながらり。参宮のこともかく

こゝろうくさる世をうらみわびしもなし。
麻の衣はいやしき賤のめも所依清めぬ
もへとよろこふいろはうすやうの彼の。
すかなふうき人も膚をけかしくふみしこく。
もかりしめうかりけりとも見て凡和光の
水は善悪の塵をえらぬ事なく利物普
潤なる誓はなとをもうるまするとのみ
その河は波つゝかりし伊勢の海に流入ぬれ
は細流巨海備えすべく一味平等の清水と
なるのことわりはもなし。あまりいかに
添泥のなく水をも汚すなく濁悪の泥り

しかるに鈴鹿川は神明の御海になりもいふ及。
かりける清浄の流ともすれはありもれの
の率にかうかうしき城内に流の
ぬ。鈴鹿巡礼の志あるとく道にて
いかにしても弱官れとへならすまね
都めとくさもやかあり。民庶のこゝかしこ
その家井のよれつゝ業とふなる所及善
施風業す。弘正寺の浄地蒸竈煙満なり。
葉桃山の禅院寺もと一見しゝく朝
鹿の名ありまいらね。びところありし優婉
曾女僧とてまかりけり。年月しとをくらせ

給ふかとこそ神鏡をまさに鑄させ給ひ給ふらく。
ことさら内侍所へうつらせ給ひけるや。仍
鏡宮とまうす。山中に宝殿をたてらるよし。
朔日ことに百練の鏡をうくるは。岸下
怖石を見し光多し。夜月にうつして富たる
かゝりとこそうけたまはれ。さこそ頼もしう
てし。ぬるくてあらくしつくもにも。樹木悉風
にうつり。あるいは浮もの形をうつされるにも。波浪
これはまほろしかたちのうつり給ふ明鏡のこと
し。りかくの色像をうつす。色像みなまなら絶
て。九界佛界共色といふも同じことをすり

いふ本来清浄の鏡なりけれども。然
に五欲煩悩のちりとゞこほりて。心鏡ふかく
くもり。三毒煩悩の霧かさなれて。朧月
仏のかげはうつらずして。ひとへにうつる気像なり。執
着しく。いろ〳〵に因ふかくあらはるゝとこゝろの。
心のうち給ふかくしく六道をめぐり。永劫
の苦患をうけしかりせば。まことにしかる神明
も。本覚真如の都をいでて。末世無縁の
生とすくはん。随縁無因の結縁となりて。常
没流転の塵にまじはりて。離るゝ大権
方便乃利益なりてこそまうす一乗円融

忠妙理なりとかや長短二首の哥を記しける
くの内外一理なる益とはかまほ

千磐振。神世不昏。朝熊之。阿波丹建
留。瑞籬農。水能心毛。伊知早久。宮居
手出而。有麓。阿利曾之上於。耀須。光
麻志和流。塵土之。積留山農。高照月
由勝而。隱奈貴。鏡宮者。多輔妒句阿
利計梨

短歌

朝熊也。豐榮登。日影社。天津神世之。鏡奈利雞禮

朝熊の山。二見浦をかけくわせさるゝ
ねしほとけ。ひかりにしたゆかさくことを
ゝくわしし。すれてらかならしわらゝを
おやしきなる人なとしへ行しりて。たま
こしくいかりとしめ色しくみね行称
ゆくほとけ。内ふかきしたまほすなを
ちう此さんうしろけいてかりね。ちまさし
の条色をおんおかけ。ときやこれしくほどく
実しきたとなりんかりかしれ。遠浦
眺てらしさく。万株の松煙かりて和し。孤鴻
激てとしゝ鳥。百尺たいいへり月かにし挽は

なかくはこはなうしつりて佐奈の神とて。
ふかき神徳しまれ。古神宮御
鎮坐の神なりとやつ侍らり。峯の
嵐のさそひしさ国をゆかりしもおさ
めるしるしの国をさまりぬ絶えし。松虫
ならぬ葉月向の尾花もうつりけしく。鈴
もし神さびたうちなき来路旅行なりて。
かゝる浦に旅衣き旅しんで神垣
とよとてくおかの小俗より八家ととしなく
石とゆうり。大淀の浦とはしてつゝりぬ
りく。伊勢路のうしともいかなれば花やら

分。南にあたりおとすむもはゝ。白き砂。雪に
ゆきてうつくしくこえなるさきの名にしほ
ふりし喜さき流れはしかしよかなくぞ
ところは国人のこなたのある。山陰しとゞく
めぐりもの入海のうち成る寺もく江寺とや
観音の霊地ありまいりぬ。昔ふこのゑ
石橋の。磐折なるく渓の湾とさしれなり。
黄葉と拂ふかうさぼとさらふの。青竹
有携て遥ならし称ありいてゝ。近しなる
ぐ。八幡坊なきなりかゝるかとなる中待と
も。世の中なるし川なるしつぬ。あはれなく。

禅徒は止住すくなきゆゑよりも邪しはまれ
ましうれ四五穴行かいかりし寒燈りしそれは。
無溪舟の簫火は消しとやく影とのこえ
尓霜鐘うこゑは徒て趙州の斧は青苔
鳳てゐく梅初ことのしらく一花一
香の流しきもくしぬもしる千手眼苔
ちらひもとりとかこそし佛おれさむし
くうり軍そ人間のおもろ梅りゆくし
と世の沙もしらそくて猿の涙もき
きりりとうか皮寺より藥れうしり
かくらく眺をすかり曲渚なるとふて。

西くの松径はちりかたくろうし。是や此着
けりし。留き径の松なりしんとさへ九。
夜もありちふへしむおもしはいそれの
しり白水郎の乙女うしへともこうく
は船さしのかりますし代ゆりけりやさ
為待しかとり此入江とまりさかしや中
猿人。そもそもは和しはこのとふみとは
そは世いはの絶のすゑてしくそ待もせ。
こころへるとこくはとはりしおかり
らくおのき待りからふ。嫂見んの一笑娥
まかく倖業の四款とほくる

浦松似畫夕陽裏　老眼摩挲貴若吟
水白細流通海脈　波横万頃列天心
雲晴雲起山高下　潮去潮來月淺深
六十餘年漂泊處　江湖風景不如今

此島のとさるの絶しもの實とうとれとろ
やまうしくゆゝしき老毛とうゆくる
紀しとのこへ霜ふりしかりしは萩
其風にゆまぬくとしゆかしおの外
おかりとゆ其浪の紋川のふよりかと
浦島の島屋おの京まとゆうかり東
とのうめも海門の舟の帆其ゆまの方

里れをとりて絃さうら鳴つてゐすむ
廣檣の書きてお見の派ゆりちらう川ゆ見
もの波煙のゆふしつゝく晴て海の
さへる國れさうみ城ありちのん屋あり
伊良虞嶋鳴海濱をもうしこまやとおも
ふゆりゆうきのさきかいくのうしゝせん名
ありをうきてくおゆり浪様なり不盡
高嶺をおかくの山とを見てしく雲も
行しねうしゆ絶しも休蒸なりれゆう
まく風ありもうこのゆいらしゝかとう絡
もなし多星の名にもかくしやゝく一浦

の地景とゝのへり。此浦に弁才天あり。今は
らハ文りしきりとらに心にもこもし花ねハ所に
みのしらして

花の浪ちらん色をこそおもへ

二見の浦せんぶもまとをのまへ
波山の道を通ひけるに小坂をあかし絶
仏すこしき古寺あり。安養山といふ。
是ハ西行上人のすミ給ひける旧跡とかや
そこを過て当利より青ハ
四十八軒の道を過て眼にしたかへり
南浮より三十一字の納

の花こそ猶しとのこえ、佛道修行のかと
すりしかとも弁財の家数のこのうちに
終にはや難波津の梅花色と弁道山の
春の霞みちぬれし浅香山花の月の
ところに湯花はなの水のなかにてまた
わ、宮川の五十鈴合ともに此のほかに葉
とうらをとに曲りて我まとし南宮の祠
も此風をとよま三一寺の僧侶をも此所に
と法しよの心まを波色に
よろかりしかる歌よりまたすさましく
世にの世としてまちし波まかり

ありひし金の所からとかや河ねすくみ
ともかりもいはしの紫の花さかれ
とかうし風吹きて難波の春ハ
と承し世をむつしき争をと花より金皆
しらぬ

難波江に咲かる花の昔にもまさ
粛々まじね絶え八旁人にまし心ふ
山邑城とのうしく風綿花のりくにし
すさまじく漢陽前のけしきのすさまじく
西草庵の中に折たく柴ふりね粛
庭の蘇ハ千絶りつくしきり稍ありて河まも

ゆく舟見えはこそふく松島あらかれと
此河わうきさハ中々公さうしくく公
さしりくきさハ河わうし実定ゆかすさ
世れをすらひの打ち物哀しく山りく
さとさ湊江兆方と見渡せば河岸ら
と洲ハみらくるしかりしきく鸚
鵡洲の所こゝまゆハよ人にして間のお
もしろき河しへ舟人のうくとも
すく競さの声とさけハ黄鶴楼ちい
ふるさとめしも心ろれ座り
近し

此地空餘山寂寞　昔人去後幾朝昏

緑蘿菴舊絶蹤跡　只有松風敲寺門

所〻廻れの後は田の三毛流れゆく
傍しかとえり。崗沼れぬ古けれまして居来
く一折けれまかしもよすかん給
しかもま向のくさうしける荒らり。
宗親の継嗣すりゆへうしとも家をく給
しまへくに云物しと大和の国とにこも
業平道とゆかりと業とりへて国の野
開すくえり尚家あり。けれ歟の松分豊
教許へりけれやぶ乾としも諸社へ条

業の懐歌は嵩でりそんしてして経りり出雲
けふの連平乞ハまさし守叉りハ業平
縁えしけ歌ましぬさねハ人のことハ
としらさりけハ今既りし業平業行けく
けり。教歌くえりとけふり一夜此ま
とのくく累日の席とおしらんとや
持しかとえりし西月とうしらす一飛は
りまきらくハ肝とけりや及席よつて
ならぬ茗庭十余人篤君類集せり。も
中えし古歌けれまし川らくむらや
かきるるさんにとせいうし給ふしかハ光

ぞいよく〳〵まて公任卿く意楽こう
りしおほかり
　まくみするものうこともくえの一節に
といふ句の侍りしよ
　人の滅とさひいくもり
と。宗蟹の作多く侍しりし。詩人の縁
吟平と存るし。満庭の感歎腸をき川。
としむさしくこの句をりんとうけ為る
所はあをくれこそとりまされ如何さう
とれも作りれく腸のうちよりいける
深き作りなき物と此宗蟹のよい

むまと恵学といくしくとおもふこ
れ庭より。吹なやさしきこその葉みき
こと葉なありきれもとあやしき
てすさいに作くなすらんとゆうし
くおもしくもさんさしとつも在り
めくこさ。むちれ作ひをなし。歌とよ
まししと。懐紙うりともなぞうりて
行末をしら作なりぬなかりそこれ作
きこえのうきさそしと踏和歌し。詠代
の如人とまなよ歌くまもし作しく
大和言葉のむへありまう。人のよ世のあ

よくとりくあそふることをかうされたる所
も山田乃原の杉乃木かけなりけりすゑんれ
うゐらんとふなる浦のへに世をうなりにけり
言の葉の餘薫・後生にかほりてひさしく枚
寄の道を繁昌しきりたること、都
のうちもさすらかうるのみあらすなりしう
とももしくてしくまうらさ川つたふ菊あし
行ふるは綺語の道にしおもむく月ふる
さしへの家川しりと彼のうへしられ
らとつきく袖せん内の亀とうしね一瑞
ともなる筆功の拙こしとをちさうるを

行しうれ、南えとふ無くへこと紀陽のかたて
しとちうしみんうしもあるなり也

源氏物語提要序

源範政

抑此ものかたりハ、上東門院の御時越前守為時
か女紫式部の書せる所に、村上天皇乃姫宮
大斎院選子内親王より上東門院へかせ
ることのかくしく、書の日の様しくもかゝり
へき双紙やありけんと申させ給へハ女院乃女
房式部をめしていかなる物かまいらすへきと
おほせられけれは、式部申けるハ、めつらかなるや

行ちるとゝあそと、よろつめつらしけるくや、おはしまし
くゑの御、此後えんをさせよといはれんハ、中せ給ひ
すゝいかゝあんと申ほかハいふなひくしつ
なうもちんやと、お旧をらみけるハ、行すゝハ、そかく
もとやけるゝはらハ、給ゑといく御いつとそ、おかう
とゝなるよりけれハ、ゆかりのよしゝそ見る石山に参籠し
くおかさとゝ、参籠に折ふし八月十五夜の月かゝ
うみおもひく、かゝりけるを見てくい見すはれ、
都良香文天に因縁なく、三千世界眼前盡
と詠しく、下句を案しける時、御宝殿の内女
かくして十二因縁心裏空と付給へりと

さく式部卿といひ出して此詩の心ハ空假中の
三諦也所詮ハ三諦一諦の法花経の内證ま
とく和歌の風俗ニ叶也とく侍るへきといひ
あらはれ也、さて伊勢物語といふ家く作者ありと
もいつれも皆業平中将ハ阿保親王の御子
伊豆内親王のうめるなり、ちゝみはゝみその母君
なし、此ちゝハ世、やまとことにすくれ
ふるしを伊勢ハいとく業原氏の名とも出
その為なりハ彼二条の后の二人の后より、伊勢
いらしにせよ、染殿の后二条の内侍を
さのふ也、伊勢斎宮の事ものしによせてハ業

御息所のむすめ歌よくしくくなるかみ
とおしゝこのみのみなりける也くれなゐさしは
う宮らるゝとむすひし事とものくみなるも
ある事なくし。文説に西宮高明のおとゝは
醍醐帝の皇子二宮の源氏なる事みなかくるゝ
らくすくれ給ひしを安和二年に左遷せられき
給ひしかは紫式部いとまゐらせわかれ悲しかりそ。
思ひなけきけるおりなれはかゝるふかきうらみと逆
に給ひし給らん色めにて光源氏になそらへて一部
の物語に出さすしていふ人にこめたるおもむきに
あらく第三の卷とにおもひやりつれは。

かゝるほとに紫式部といふ名はあまねくよにかくれな
らさりしかともひかりかはりし。大宰帥にうつされ給ひしを
須磨の浦にうつされ給ひしかはみまをとふらふ人の
いかにかなしかりけんや殿の左遷のはゝ式部はいかゝおもひ
こゝろうかりけるかうちみまされし源氏の事なるへし。これ
式部ら一条院のおんめのとの子也。上東門院へ出仕
とてこそ宮つかへせしかは。かの御ゆかりのもの也。義とさへしめをを
の給ひくしけさ源氏のひとつもとりて式部か給れ。
野とかけりしみ義よりも公寺とかそりしは
くまみなしも也。しかるゝ紫式部ともし給へらつうえ
し花は藤式部といひしと。幽言なつし源氏そゝ紫

菅の家は文章。むかしより紀式部とならぶ道。ならびなきに
まさりて。おほやけもわたくしにもおほく人の
とひかうし。から國のことわざのみしりがほに
ゆりつゝ入ぬまでこそありて時うつりゆくさ
きこえもらしぬ桐壺とすかしまゐらせしが此君の
家のこゝろしにあらまし。世ことに神のへし御
むくらゆくこと。すといふ御事ならしものなき事
となりけし三四代のわひさ。君し給ひもすらはか
との事とのそのかはりて君臣父子夫婦兄
弟朋友のこともいふ。教化の道倫理のそむ
こ時りつきくはそうしめそしへとゝふ

事なし

扶桑拾葉集巻第十六終

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan